

# 長期出仕型ボランティアの社会的世界

—— ある日本語ボランティアの現場から ——

湯 川 宗 紀・大 東 貢 生

## 要 旨

本稿の目的は、長期出仕型ボランティア（自らが生活する地域に密着したボランティア）の社会的世界を明らかにすることである。

そのために、今回は地方都市で働く外国人労働者とその家族向けに行われている日本語ボランティア団体に対しての聞き取り調査結果と、先行する長期滞在型ボランティア（自らの生活の場から離れて災害地に滞在してボランティア）研究とを対比させ、長期出仕型ボランティアの特質を明らかにすること試みた。

その結果、まず、長期出仕型ボランティアたちは、自らが興味・関心を抱く対象に関しては、ボランティア活動に限らず、直線的に関わり、活動する場は非日常空間ではなく、これまで関わりを持たなかった場、未知なるものとしての日常空間が活動対象、関心の対象となっている。そして、参加者たちが活動を行っていく上で、個々人の自由意志というものがもっとも尊重され、それが集団の中心的な価値として作用していることがわかった。

キーワード ボランティア・社会的世界

## はじめに

1995年の阪神・淡路大震災以降、爆発的に増えたボランティア、ボランティア活動は「ボランティアブーム」という枠に収まらず、着実に日常生活の中に定着してきた。それに伴いボランティアに関する研究も数多くなされ、示唆に富む報告がなされている。

本稿ではそれらの研究のうち特に1999年、吉田によってなされた日本海重油流出事件についての研究「遊びと覗きのあいだー重油災害ボランティアセンターにおける長期ボランティアの社会的世界ー」を参照しつつ、吉田の言う「長期一般ボランティア」、自らの生活の場から離れて災害地に滞在してボランティア活動を行う「長期滞在型ボランティア」と本稿の事例で

ある自らが生活する地域に密着し、日常生活の中でのボランティア活動、いうなれば“長期出仕型ボランティア”の当事者たちの内面・質的なものを比較し、類似点、相違点を考察し、長期出仕型ボランティアの社会的世界を考察する。

## 1. 非日常のボランティア

ー災害地における長期滞在型ボランティアー

1999年、吉田が日本海重油流出事件について行った調査研究、「遊びと覗きのあいだー重油災害ボランティアセンターにおける長期ボランティアの社会的世界ー」は1997年1月2日、日本海、島根県隠岐島沖において、重油約19,000klを積んだロシア船籍タンカー「ナホトカ」号が破断事故を起こし、積み荷の重油、約6,240klが海上に流出、また海底に沈んだ船体の油タ

ンクに残る重油約12,500klの一部はその後も漏出を続けた事故に関して、沿岸に打ち上げられた重油を回収する「重油回収ボランティア」を対象とした調査研究である。

吉田は事故後間もなく「重油災害ボランティアセンター」に参加観察という形で関わり、V・ターナーの言う儀礼の過程、「コムニタス」概念を用い、日常と非日常を行き交うボランティアたちの内面を描き出している。

吉田の論を整理すると、まず、①ボランティア当人の内的な動機として「非日常」への憧れがあり、②被災地には期待された通り圧倒的な「非日常的雰囲気」がある。この「非日常的雰囲気」は、③組織が持つ構造によってボランティア参加者を「非日常的なドラマ」に登場させ、演じさせることにより、「雰囲気」から、「重油災害ボランティアとしての生活が孕む非日常性」、つまり重油災害ボランティアとして生活すること自体が④ボランティア当事者の期待、憧れをかなえることとなる。

次に、その期待、憧れがかなう空間、非日常的な空間はまた、⑤「匿名性」によって保障される「自由な空間」でもあり、それによって⑥「日常世界のしがらみや社会的立場を超えた匿名的な空間」、コムニタスが生ずる。その空間での危険を伴う重油回収という行為、経験を共有することによって、ボランティアたちは、⑦「連帯感」、「精神の共有」、「仲間意識」を育むことになる。

さらに、「長期スタッフが集団で宿舎」することにより、外部から隔絶され非日常的世界の自由のある⑧「拘束生活」の中で遊ぶ存在になり、その世界に一度⑨「没入」したものは「リピーター」となって日常と非日常を行き交いながら現地に舞い戻ってくることになる。

吉田は「非日常性」という要因が、長期滞在型ボランティアを構成する九つの要素、「① 動機」、「② 雰囲気」、「③ 組織構造」、「④ 自己実現」、「⑤ 匿名性」、「⑥ コムニタス」、「⑦

我々感（仲間意識）」、「⑧ 拘束生活」、「⑨ 没入」と密接に関係し合い、成立している様を述べている。

それでは、本稿の事例である長期出仕型ボランティアにとって、長期滞在型ボランティアにとって重要な要因である「非日常性」は該当するのか、あるいはそのほかに大きな要素があるのか、また長期滞在型ボランティアを構成する要素は長期出仕型ボランティアではどのような形をとり、どのような位置を占めるのか、以下その点について考察していきたい。

## 2. 日常生活のボランティア

### ー生活地域における長期出仕型ボランティアー

#### 2-1 事例説明

本調査の対象である日本語ボランティア「S」は、関西の地方都市で主に地場で働く外国人労働者、その家族に向けて開催されている。「S」は、行政機関や企業・大きな団体によって運営されているわけではなく、市民の草の根ボランティアとして2001年一月にスタートした。授業のテキスト、準備など運営費用として、行政からの援助金が年額8万円しかなく、受講者から受講料として月500円、またスタッフからも積み立てとして月500円を集めて賄っている。

当初スタッフ数名からスタートし、徐々に受講者の数が増え、現在ではスタッフ18名、受講者21名となった。だが、「S」は方針として、大人数に対して一人の指導者が講義を行うような形式は取らず、指導者一人に対し受講者一、二人の割合で対話しながら学習を支援する形式を取り、日本語学習充実を目指している。そのため、現在は受講希望者十数名が待機している現状である。

スタッフは学生、定職をリタイアしたもの、主婦、定職を持った者とバラバラで、年代層も様々で、スタッフ、受講者の都合を考え、開催日は毎週日曜の午前中に設定されている。「S」

に通う受講者の日本語レベルは初級、中級、上級と分けるならば、少数の中級者をのぞいてすべてが初級者レベルである。それは、大学、大学院留学生レベルの日本語が上級者レベルと設定されているため、上記のように「S」が対象にしている受講者は主に地元で働く外国人労働者、その家族であり、専門レベルの日本語を必要としているわけではなく、日常会話レベルの、日本で生活するための言葉を必要としている者が多いためである。

※ 本調査は2003年5月～2003年9月にかけて調査対象である「S」所在地に出向き、個別に行った聞き取り調査である。調査対象者は2003年5月～2003年9月時点での「S」スタッフであり本文中の年齢、職業等はその時点のものである。本文中調査対象者についての扱いはプライバシー等を配慮仮称（Aさん、Bさん、Cさん、・・・）・性別・社会的地位・年齢を表記するにとどめる。

## 2-2 きっかけは市の広報誌

きっかけは、たまたま目にした市の広報だった。誰もがふだん熱心に読むわけではなく、そのなかに書かれたボランティア募集の記事を目にしても、そう突き動かされるものではない。しかし、今回の調査ではその普段熱心に読まない市の広報にあるボランティア募集記事をもて、この活動を始める人たちがいた。

「S」のスタッフの募集方法は、創設当初の知人などに対する呼びかけからはじまり、大手の企業や銀行などの掲示板にチラシやポスターを張らせてもらったり、新聞や市の広報、タウン誌に募集広告を載せる形に変化させていった。今回インタビューしたインフォーマントたちが「S」での日本語ボランティアを始めたきっかけは、意外なことに市の広報を目にしたことであった。

えーと、なんか、市の、なんなんですかね、ポストの中に入ってあった市の情報みたいな。広報、みたいなんですかね、お店の紹介とか、一枚だけ、一枚これくらいのやつです。そうですね、生け花教室とかあるとか、募集してますとか。（Aさん 女性 大学生 21歳）

「S」での活動を始めて半年ほどたつAさんは、「S」のある地域の大学に通う大学生で、遠方からの下宿生活を行っている。高校時代から始めたテニスを大学時代も続け、三回生終了時にテニス部を引退するまで、日々クラブ活動して過ごし、クラブがない日はアルバイトをしていた。これまでボランティア活動経験は全くなく、「時間がなかった、ですね」と彼女は言う。

クラブ活動を引退し、ふと目にした一枚の広報を見て、彼女は「不安はあったと思います」と言いながら「とりあえず見に行く」、「一回見ないとわかんないかなって感じで」、「S」に見学に行くことにした。これまでの生活で普段外国人と接する機会はほとんど無いながら、中学生時代から漠然とした外国への興味があったという。

外国に興味があるので、外国に行ってみたいとか、外国の文化とか習慣とかを直接見たりとか聞いたりとか、興味があるんでね、それで。外国の方と接してみる、向こうの文化を知ること出来るだろうし、とか言うのをしてみたい。

彼女は外国に「未知の世界」を見、未知なるものへの好奇心が多分にあったという。

市の広報かなんかに、ボランティア募集というのが載ってましてね。今来ている人もほとんど、その時から来ている人が多いと思うんですけどね。（Bさん 男性 リタイア生活 53歳）

長年、年医療品店を経営してきたBさんは体

調不良を期に店を譲り、体調が落ち着いてきてから「家にじっとしているということになった時点で、何かぼうとしているだけではないかんの、なんか、できることね、金儲けはできんから、ボランティアでもとえば失礼やけど。」と活動に参加した。Bさんも「S」での活動経験は半年ほどである。

Bさんはこの「S」での活動を始めると同時に、視覚障害者のためのボランティア活動も行っている。Bさんの場合、高校時代YMCAの活動として地域の福祉施設に放課後慰問という形で何度か訪れたことはあったが、事業が忙しくこれまで地域の活動やボランティア活動に、積極的に関わることはなかった。

ただ、「外国語というものに興味があり」、大学は外国語大学に通った。大学時代はタイに興味があったわけではないが、タイ語を専攻した。

外国語学部でも、その頃だったら、例えばもちろん、英語とか、フランス語だとか、ロシア語なんかも人気があったかな。中国語なんていうのはまだまだでしたけどね。だから就職とかにも有利な、ポピュラーなというか、メジャーな外国語よりも、ちょっと人数が少なくて、面白い、例えばモンゴル語とか、そういうところも考えていたんですけどね。ちょっと変わったという意味で。

「メジャーな外国語」よりも、「ちょっと変わった」もの、多く知られているものよりも、あまり知られていないもの、未知なるものに対する好奇心がBさんの話からもうかがい知ることができる。

ちょっとたまたま、市の広報関係で見て、そしてまあ見学して始めたって事なんです  
(Cさん 男性 リタイア生活 61歳)

Cさんは、定年まで会社に勤め、それまでの生活では仕事が忙しく、また仕事の関係上所謂「転勤族」であり、一カ所に腰を落ち着けて地

域との関わりを持ったり、ボランティア活動をする機会は得られなかった。

だが、仕事で忙しく全国を飛び回することは自らの嗜好に合っており、

もともと会社関係でも全国出張してたり、しらないとこ見たり文化見たりいろんな地方見たりするの好きだったから、旅行なんかしてた。

そして55歳から退職後の生活を考え、趣味もかねて地元名勝地のボランティアガイドを行うようになった。そして市の友好都市である中国湖南省を友好使節団として訪れた折、次のような思いとなった。

一応普通の観光ツアーではいけないような、いろんな所見て、異文化というか外国に、一応垣間見たというか、ほんの少しかも知れないけど、普通の人よりちょっと見たと、そう言う経過があったものですから。

外国に行ったことはなかったから、外国に、異文化に興味をわいてそれで、接する機会がないかと。

リタイア後も活発にボランティア活動以外にも油絵サークルに通い、自ら「僕はじっとしてるのがならんのやな、性格的に」と語り、ボランティア活動を通じて「色んな世界が見える。僕は好奇心が強いからね」という。

## 2-3 未知なるものへの好奇心

これまで紹介してきた三者は、三者ともこれまで熱心にボランティア活動に取り組んできたわけではない。だが、ボランティア活動を始めるまでの生活で積極的に社会と関わり合おうとしなかったわけでもなく、自らをもてあましていたわけでもない。それぞれの生活において、自ら関わる対象を定め、そのことに積極的に関わり、ここに充実した生活を送ってきたことがわかる。

そしてそれぞれが、自ら定めた目標、対象に

一区切りをつけたとき、これまで培ってきた、あるいは本来持って生まれた積極的な活動性、旺盛な好奇心は異なる対象、目的を探し始める。三者がボランティア活動を始めたきっかけはこれまで述べたように、普段気にもとめない市の広報であった。だがそれは、何か新たな好奇心の対象を探し求める者にとっては重要なきっかけとなりうることがわかった。きっかけを得た好奇心は、ほとんど戸惑いなく、肯定的にに換言すれば安易に、一度見てみよう、と行動に移る。

好奇心が突き動かすその身軽さ、三者に共通する要素として「外国」というものに対して旺盛な好奇心を抱いていることがわかる。それは具体的な外国、アメリカであるとか中国であるとか、よりも、むしろ漠然として外国という「未知のもの」に対し強く惹かれるものを感じ取っている。これは、日常：日本、非日常：外国として理解することができなくもないが、非日常へのあこがれ、あるいは日常から逃避する形での非日常へのあこがれ、日常でない非日常への、此処ではない何処かへの逃避的な希望ではない。

身近というか、向こうに行つてまで将来、向こうに行つてまで就職しようとは思わないんですけど、身近って言うか、近くで話せたりとか出来るから。(Aさん)

むしろ、日常にないものへの未だ知らないものへの好奇心、それを見聞きし、体験し、我がものとして日常に生きること、自らの中に非日常的なもの、未知なるものを取り込むことへの希求心の現れ、自己実現への希念であるといえる。

そのことは以下の発言からも推察することができる。

やっぱり、やっぱり自分の中でプラスになると

は思います。経験にもなるし。(Aさん)

ああいう人らと接することによって、こうどういううんかな、自分にはない、新しい見方というのと感じさせられるのが、それはよくありますね。(Bさん)

僕は半分以上自分のためにやってると思ってるから、どちらかというと自分、自分の研鑽が半分以上かなあと思ってる、ボランティアも。(中略) 自分自身も世界が広がったなあ。(Cさん)

さらに、未知なるものへの探求は、受講者である外国人、外国へのみ向けられるのではなく、同僚であるスタッフにも向けられる。

こっちが地元ではないので、年の違った人とか、地域の人たちとお話できたりとか、違った職業の人とお話できたりとか。(中略) 市民活動の実態じゃないですけど、どういう風にやってたのか知れたりしたのが良かったと思います。

(Aさん)

仕事を離れて人と接する機会というのが当然狭められてますから。だからそういうところやこういうところへ行つて、職員の人と喋ったりとか、いろんな人と、人と会う機会も増えるし、そういう意味で自分の刺激にもなるし。(Bさん)

あの学生もいんのよ。二人か三人ぐらい。そんな人達としゃべれないもんね、同じテーマで。ほら、感覚わかるやん、はなししてて。それだけでもプラスよ。(Cさん)

ここでは、非日常的な「外国・外国人」といった未知なるものへの好奇心だけではなく、日常に見られる未知なるもの、自らが普段見ることはあっても関わり合うことのない未知なる他年代との関わりが肯定的に、新たな発見として自らの好奇心を満たしてくれるものと受け止められている。

## 2-4 好きなことをする

ボランティア活動という場において、自らの

好奇心の動きを、充足感を満たすことを三者は積極的に肯定する。そこではボランティアという言葉が、「好きなことをする」という言葉に近づき、また「好きなことをする」ということがボランティア活動の動機の語彙として登場することになる。

(ボランティア活動をしているって言う意識は)あんまり無いんです。(中略)今の私の考えだと、ボランティアをする人がやりたいからやっているとというのが真理というかあると思うんですよ、いってみれば自分がやりたいからやっているとないかなっていうのがあるんですよ。(中略)やっぱりその中でも自分がやりたいから、向こうの力になりたいからってというのが根本にないと、相手のためだけってというのは実際にはどうなんだろう。(Aさん)

他人に役立って、なおかつ自分もこう納得できるというか、自己満足できる、点あった方が長続きするように思いますけどね。相手に役立っている、役立っているばっかでは、なかなか続けるのはしんどいと思いますけどね。(中略)だから、やっぱり多少でも興味があって、好きなことをやるほうがいいんじゃないかな。(Bさん)

就労経験のあるBさん、Cさんは「好きなことをする」、ボランティア活動をするということが、自由意志であり、それが「義務」ではないことを「仕事」、「お金を稼ぐこと」との対比によって説明する。

ストレスがたまってはいかんので。まあ病気のことだってね。だから制約が無いというか、あくまでもお金をもらったりしたら、これをいつまでせなあかんとか、明日はぜったい行かなあかんとか、今日は5時までおらなあかんとか。Mustとかいうか、「ねばならない」がくっついて回るけども。それでは体にマイナスであるんで、あくまでもこっちの自発的な意思でお手伝いすることだけするということですね。

困ることはやはり深く入り込むと、ボランティアであってもボランティアでなくなるような義務感が生じるというかね。それをまた生きがいにする方もいるんでしょうけど、僕の場合は困

りますけどね。(Bさん)

(いやなこと)なんかないなあ。あればそんなに参加しなければいい。ボランティアやと言うことやから。ほんで自分はNOにしようと思ったらNOで通るんやから。そういう事、そんでマイナス面は発生しないと思います。どうしても嫌やったら、僕は辞めてないけど、辞めてる。会社は会社でやっぱ組織だし、上下関係上下なあ、こっちはほんま打算がない。あの、ボランティアは。で、いいなあ。(Cさん)

つまり、自分がやりたいからやっている、当然相手がいて成立するボランティアであるが、まず第一義的に「自分のやりたいこと」があり、自由意志がある。「自分のやりたいこと」に対し、そのサポートを受けたい人がいる場合はボランティアが成立し、「自分のやりたいこと」の発露としてボランティアがある。もしそこに意志に反した義務が発生したり、嫌なことがあれば、止めればいい、とその流れから降りる自由を認めている。

## 2-5 浅く、区切られた関係

個人の自由意志を尊重し、それを第一にボランティアを考える三者は他者との関係においてどのような距離感を取っているのだろうか。

質問者 日本語教育で知り合った外国人の方とですね、授業のあと遊びにいくとかはないですか。

Aさん ああ、そういうのはないです。

質問者 勉強は勉強で終わって、そこでさようならまた来週って。

Aさん はい、今やってる方とは、そういう。

質問者 他のボランティアやってる、色々年代とかあると思うんですけども、そういう方との交流とかはどうですか？ボランティア以外で一緒に遊んでみたりとか。

Aさん ないですね。教室の中で一緒に勉強している方と、お話しして、時間が来て終わって、個別に帰って感じなんですけど、接する人っていうのはいつも

教えてる人っていうことになってくるんで、他の人とはあんまりおしゃべりとかしないので、それはないですね、はい。

Bさんも同じようにスタッフ同士で「詳しくは話したことがないんです」と言い、受講者との関係についても教室を離れた関係というのは「今のところは無いみたいです」ね、プライベートな話は「一人一人わかりませんがね。なかなかそんな時間が無いんじゃないかな。」と言う。Cさんもまた、スタッフ同士で「別に飲み会するわけじゃない」、受講者とも、勉強会を終わったあとにご飯を食べることは「ない」という。

Bさん、Cさんとも今後ボランティアを通じてもっと交流が盛んになることを望んではいいるが現状では「ボランティアやから役員の人みんな忙しいのよ。」(Cさん)と、それぞれの忙しさを語る。

三者の日常生活において、先述したようにAさんは他地域から大学に通うため下宿生活をしている。そして大学生活、クラブ活動を積極的に行い、その合間にはあるバイトを行っていたため現在生活している地域との関わりは薄かった。

質問者 大学ではクラブ活動以外に地域奉仕とかはやってなかった？

Aさん やってなかったですね。

質問者 じゃ、ただだんに、こっちに住んで、大学に行って、帰るって言うのが生活だった。

Aさん そうですね、はい。

質問者 周りに住んでいる地元の人たちと話をするとということも。

Aさん そうですね、挨拶をするくらいですね。

Bさんもリタイアするまでは「一生懸命仕事してましたよ、ほとんど休みなしで」という生活を続けてきた。

小売店でしたからね。日曜祭日営業でしょう。そういう意味で、子どもにも申し訳ないと思うくらい、子供が小学校中学校とか、PTAとか、地区の何となくとか、そういった活動とか殆どタッチできなかったですね。だから、小学校、中学校、まあ中学校の運動会には行かなかったけど、小学校の運動会には一遍しか行ったことがないし、学芸会とかも行ったことないし、そういう意味では、ちょうど忙しかったですからね。まるっきりノータッチというか、携われなかったですね。

さらにCさんも自ら「転勤族」と言うほど日本全国を飛び回り、高度経済成長期の影響もあり土日もなく仕事のために活動し続けてきた。現在の居住地に落ち着いたのは6年前、それでも退職まで五年間は大阪の会社に通い続けてきた。

三者とも旺盛な好奇心を発揮し、未知なるもの「外国(人)」,「他年代」を知ること、それらと関わることに喜びを覚えていたが、ある一定の距離以上にそれらと関わることに對する配慮、戸惑い、あるいは割り切りが見受けられる。また、三者とも、これまでの生活において自身の興味、関心の対象、それがクラブ活動であれ仕事であれ、については積極的に関わってきているが、日常の、本来の生活世界での関わりは希薄なように見て取れる。これは何を意味するのだろうか。

三者に共通に見える関心事についての積極性、それと相反するような生活世界での関わり、関心事の延長線上にある関わり、この割り切りは個々人の「やりたいことをする」、「嫌なら辞める」という自由意志を第一義におくため、自らの意志の尊重し、それを善しとする結果、他者に対する干渉を控える傾向があるのではないだろうか。

### 3. 長期出仕型ボランティアの構成要因

これまで長期出仕型ボランティアに従事する

人々たちの語りから、幾つかの特徴的な点が見えてきた。それでは長期出仕型ボランティアを支える構成要因は何なのか、それを第一章でまとめた長期滞在型ボランティアの構成要因、それと対比させながら顕然にしていきたいと思う。

長期滞在型ボランティアの社会的世界では「非日常性」という大きな要因が、九つの要素、「① 動機」、「② 雰囲気」、「③ 組織構造」、「④ 自己実現」、「⑤ 匿名性」、「⑥ コミュニタス」、「⑦ 我々感（仲間意識）」、「⑧ 拘束生活」、「⑨ 没入」と密接に関係し合い、成立していることはすでに述べた。

まず、「① 動機」の面において長期滞在型ボランティアが内的な動機として「非日常」への憧れを抱えているのに対し、長期出仕型ボランティアはその旺盛な好奇心、活動性が対象となったものへ突き動かせる。その時、対象に向かって戸惑いも、消極的な思考はあまり働かない。「やりたいことをする」という積極的な意識によって、対象が選ばれ、それがボランティア活動である、ということが従属する形で突き進んでいく。

次に長期滞在型ボランティアでは活動する場に圧倒的な非日常的「② 雰囲気」が漂っているのに対し、長期出仕型ボランティアが活動する場合は、日常の風景にありながら、日常的に関わることはない人や空間が広がり、そこには非日常的な「⑤ 匿名性」、「⑥ コミュニタス」があるのではなく、当然のものと受け入れられる社会的属性（女の子、であったり大学生であったり、退職者）や説明可能な非匿名性、顕名性（出身地や居住や社会的属性）がある世界、いわば日常の生活世界の延長線上にある未知なるものが存在する空間としてある。

そこで尊重されるべきは本人たちの自由意志であり、そのため個々人の嗜好性を持った「④ 自己実現」は積極的に肯定され、それを侵害するような「⑧ 拘束生活」は強いられず、結果的に強固な「③ 組織構造」は成り立たない

(cf. やめたければやめられる)。

また個々人（の自由意志）を尊重する結果、過度な接触、干渉は好まれず、沸騰するような「⑦ 我々感（仲間意識）」は生じ得ないし、極個人的な目的（やりたいことをする）を持った行為のため、それとそれ以外のものとは明確な区切りがつけられパラレルに配置されているため個人的な「⑨ 没入」はあるが、そこから密接な関係は生じない。

つまり、長期出仕型ボランティアという社会的世界では、旺盛な好奇心が「やりたいこと」見定め、それに向かって積極的に進んでいく。その「やりたいこと」、自由意志は第一義的に尊重され、「ボランティア活動」はそれに従属する二義的なものとしてある。その活動の場は非日常的なものではなく、日常にありながらあまり関わりのない世界、日常生活の延長線上にある未知なるもの、がある場である。当事者は自らの自由意志を尊重するがため、他者の意思も尊重し、配慮した結果、過度な干渉は好まず、それぞれが個々人の持つ「やりたいこと」に向かって進むことになると考えられるのではないだろうか。

## まとめにかえて

これまで、日常の生活を営みながら定期的にボランティア活動に従事する、長期出仕型ボランティアの社会的世界について、インタビュー調査から得られた結果を基に考察を行ってきた。その結果、以下の点が長期出仕型ボランティアの社会的世界を構成する大きな要素として考えられる。

まず、動機の面に関して長期出仕型ボランティアの参加者たちは、旺盛な好奇心を持ち、自らが興味・関心を抱く対象に関しては、現在関わっているボランティア活動に限らず、積極的に、直線的に関わっていくということがわかった。次に、活動する場は非日常空間ではなく、日常



空間の延長線上にあるが、これまで関わり合いを持たなかった場、未知なるものとしての日常空間が活動対象、関心の対象となっている。最後に、参加者たちがボランティア活動を行っていく上で、個々人の自由意志というものがもっとも尊重され、それが個人だけのものではなく集団の中心的な価値として作用していることがわかった。

今後の課題として、今回わかった長期出仕型ボランティアの構成要素、旺盛な好奇心、日常にある未知なもの、自由意志といったものが、今回の調査で明らかになったこと以外に、どのような意味を持ち、どのような働きを持っているのか、それがボランティア活動、あるいは社会的世界に対してどのような関わり合いを持ち、どのような影響を与えているのか、特に、自ら選び取った活動以外の活動、自らの生活世界の面に見られるある種の希薄さなどについてさらに考察する必要が考えられる。

#### 参考引用文献

- 「遊びと覗きのあいだー重油災害ボランティアセンターにおける長期ボランティアの社会的世界ー」吉田竜司『ナホトカ号沈没に伴う日本海沿岸地域への被害に関する社会経済的・生態的影響調査』1999 富山大学環日本海地域研究センター
- 『儀礼の過程』V. W. ターナー 富倉光雄訳 1996 新思索社
- 『平成13年社会生活基本調査』総務省統計局 <http://www.stat.go.jp/data/shakai/>
- 『みんなぼっちの世界』富田英典・藤村正之編 1999 恒星社厚生閣

#### 【付記】

本稿は、平成15年度佛教大学特別研究助成（代表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（ゆかわ むねき  
龍谷大学大学院社会学研究科研究生）  
（おおつか たかお  
佛教大学社会学部専任講師）

## A long-term attendance type volunteer's social world From a certain Japanese volunteer's spot

Yukawa muneki, Otsuka takao

The purpose of this paper is clarifying a long-term attendance type volunteer's social world. ("A long-term attendance type volunteer" means the activity sticks to the area where one-self lives, and performed in everyday life.)

Therefore, we conducted interview investigation to the staff of the Japanese volunteer organization which is held for the foreign worker who works in the local city in Kansai.

By comparing the result obtained by interview investigation with A long-term stay type volunteer's composition factor drawn from the precedence research on a "long-term stay type volunteer" (a volunteer performs by separating from the place of one's life and staying at the stricken area), I tried to clarify a long-term attendance type volunteer's composition factor.

Consequently, it turns out that volunteers have flourishing curiosity, and they will concern themselves positively about the object which holds interest and concern. Not only the volunteer activity concerned now.

Next, the place where they work is on the extension of space not non-every day space but every day space.

However, the place is set as the object of concern for activity. Because, it is since it was space every day strange for them.

Finally, individual free will is most respected, when volunteers work. It became clear that it is acting as a group's not only an individual but central worth.